混沌の輪廻の世界

サースィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
混沌の輪廻の世界

【Ｎコード】
Ｎ９７８５Ｇ

【作者名】
サースィ

【あらすじ】
混沌と狂乱がうずくまる世界、観察者はもう世界への希望も見出せなくなっていた。何故なら、彼にさえ全てを諦めさせれる程の絶望がそこにはあったからだ。そんな世界の中、一人孤高の旅をする“戦わない”男がいた。

序章　世界の観察者（前書き）

これは私の処女作です。なので見苦しい表現や、意味がわからない点があっても少し大目に見てください。
ただ、私は本気で小説家を目指しているので意見等は頂けると助かります。

序章　世界の観察者

序章

　時の輪廻、破壊の輪廻、始まりの輪廻、終わりの輪廻、人生にはたくさんの輪廻が満ち溢れている。
これはいままで私が見て来た、どんな世界でも共通していることだ。
しかし、この輪廻が狂っている世界があったらどうであろう？我はこの世界を見つけた時、愕然とした。
この世界はあきらかに救いようのない、哀れな世界だとはっきり理解出来てしまえたからだ…。未来永劫救われないであろうこの世界、我はこの世界にカオスという名前を与えた。カオス…それは混沌という名。
ある人物が言った。混沌とは全ての物が交じり合い、形を失うことだ。ただ、その後に言った存在の否定こそ究極の混沌だ、と言う言葉には同意しかねる。
混沌とは調和の裏返し…、混沌とは存在してはいても日々その存在意義が変わるものでなければならない。
では、何故私はこの世界をカオスと名付けたのか？
それはこの世界が先程私が解釈した、混沌と言う言葉にもっとも似合っていると思ったからに過ぎない。
もちろん、それは見ることしか出来ない私が感じた私主観のものだ。
だからこそ、私以外にも見て貰わなければならない。
この世界のすべてを観察して、そしてお前達も決めるが良い。この世界に相応しい名前を…。
もちろん、この世界の定理も限界も終わりも始まりもお前達が知ることは出来ないと思うが。

おお、私の名前か？　…そうだな付けるとしたら、
ただの無力な観察者…だな。

序章　世界の観察者（後書き）

まぁ、少し序章なので少なくなりましたが、これからもたくさん書いていくのでどうぞよろしくお願いします。
あ、本当にありがとうございました。

一章　戦いを望めない男　1

一章　戦いを望めない男　1

一章　戦いを望めない男

カーグライト高原、種類豊かでいて凶暴なモンスターが、たくさんいることで有名な高原だ。そこにその男はいた。
男は漆黒のマントをかぶってたたずんでいる。旅人なのか、マントの下にも軽そうな素材で出来た鎧が一枚あるだけだ。まるで、それだけの装備で圧勝出来る自信があるのか、その男は高原の道を進む。だが当然、ここのモンスター達はこの余裕の獲物を見逃す筈がなかった。ひっそりと背後に数匹のモンスターが近づいて行く。
「…やめておけ。」
男は急に振り返り、近づきかけていたモンスター達を睨んだ。突然のことにモンスター側も少し飛びぬく。モンスター達は男が自分達の存在に気付いていたことに少し動揺した。
長く人間を糧に生きてきた彼らにも、襲われる前にこちらの存在に気付く獲物は初めてだったのだ。男はモンスターに…いや、誰ともなく話かける。
「俺には挑まない方がいい…。いや、挑むな。」
もちろん彼らに人間の忠告を聞くつもりは毛頭なかった。男が話す間もゆっくりと周りを囲んで行く。だが、男はそのことに気付いていた。
「…引かないか。仕方がない、俺は今戦うわけにはいかないんだ。」
男はそう言って、モンスター達を見わたした。そして、キッと睨みつけたけたかと思うと

モンスター達に有無言わせぬ重圧が襲いかかった！
ギャヨエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！

モンスターの絶叫がほとばしる。しかし、彼らの中でダメージを受けている者は一体もいなかった。
「少し経てばすぐに動けるようになるだろう。じゃあな。」
男はそう言うとさっさとその場から消えた。同時に悲鳴も止まる。
その場に残されたモンスター達はただただ、呆然としていた。

モンスター達の前から消えた男はしばらく進むんだ後、突然上を見上げた。
「・・・なんだ？戦闘は行っていないだろう。」
男は天に向かって呟く。すると、天から声無き声が男に届いた。
「ステイクよ。何故あいつらに向かい会った？お前なら、出会わず避けて逃げる道もあっただろう。」
ステイクと呼ばれた男はさらに答える。
「そんな離れ技を使う必要はないだろう？あいつらにはあれぐらいが適量だ。」
声は言葉を返す。
「だが、お前への命令は“戦闘の対象外”に外れることだったたろう。今回は本当にぎりぎりのラインだ。何度もあんなことは許されないぞ。」
「・・・わかってるよ。」
ステイクはゆっくりと頭を振った。
「この混沌の世界で・・・俺が生きていられる方法はな。」
そう言うと、ステイクはゆっくりと歩き始めた。混沌の世界で生き続ける・・・捕らわれの自分を演じるために。

一章　戦いを望めない男　１（後書き）

また短くなってしまいました。

一章　戦いを望めない男　２（前書き）

続きです。今回は新設定を加えました。（大量に）
時間掛かってすいません。

一章　戦いを望めない男　2

空の闇がより濃くなるその下をステイクと言う名の青年は平然と歩いていた。辺りには鬱蒼とした樹木しかなく、その中をずんずん進む青年の姿はまさに異常であった。ふとステイクは立ち止まる。

「・・・着いたか。」

誰にもなく呟いた彼だったが、その言葉に反応する者がそこにはいた。

『ふむ、確かにここが今回のターゲットタウンのようだな。』

いきなり、天から女性の声が響き渡った。実際はステイクの頭の中にしか届いていないのだが、まぁそれはいいとしよう。声は一見空から聞こえているように錯覚するが、本当に空から聞こえてきていた。声の主はわからないけれどどうもそうらしい・・・。原理はどうなっているのだろうか。

「あのな、任務だか命令だかしらないが、俺の独り言にまで律儀に答えないでくれないか？」

『それは出来ない。いくらお前が下等な人間だからと言って、命令は命令だ。それなら私は“お前のどんな一言一言にも必ず反応する”という命令も必ず守る。何よりそれが大天使様の命令だからな。』

大天使とは天界での上司らしい。しかも天界では彼女の親代わりを務めていたらしい。ごくろうなことである。

そろそろ、彼女の名前を明かしてもいいだろう。彼女の名前はフィアー・リドネイル。中級天使の第１２位に位置している。一言天使と言ってもその種類は数百とあるのだが、彼女の種族はその中でも上位族に位置している“英霊王族”と言う種族だ。彼女もこの種族の直系であるらしく、とても、たいへん、偉そうだ。いや、本当に偉いのだ。

だが、そんなことはステイク、本名ステイク・ケネプティアには少しも関係ないことだった。

「大天使様、大天使様って・・・追っかけか（ボソッ）」
『・・・何か言ったか？』
ギロリとフィアーが睨むが、ステイクは少しも動じない。すぐに的確に言い返した。世論では屁理屈と呼ばれているやつである。
「ふ、聞こえなかったのか？どんな一言にも必ずとか言いながら、ボソッと言った言葉に反応出来ないんとは・・・これじゃあ大天使とやらもたいしたことないな。」
『な、な、なんだと・・・このーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！』
彼女がそう叫ぶ。それと同時に、空から何十もの雷が降り注いだ。
『ばかもの！ばかもの！！ばーーーかーーーもーーのーーー！！！』
まったく加減のない怒りの一撃がステイクを連ぬく。・・・ように思われたが、
「ふぅ、すぐにぶちぎれて疲れないのか。それともただ、疲れを知らないばかなのか？」
彼は全ての雷をかわしていた。それもまったく息切れすら見受けられない。
だが、彼女も中級天使。そんなことはまったく気になっていないようだ。さらに激しい雷が何十発も放たれる。
ズザザーーーーンッ！ズガガーーーーーーン！ズドドーーーーーーーーン！ズッシャーーーーーン！
『はぁ、はぁ、はぁ、』
ようやく疲れたのかフィアーは息を切らし始めた。そこを狙っていたかのように・・・（事実狙っていたのだが）ステイクはネチネチと嫌味を言い放った。
「逆上しといて、力を使い切って、自分が下賤と言った人間一人傷つけられないとは・・・お前、本当に、バカだな。クズだな。駄目だな。今ごろ大天使もがっかりしてるだろうな。」
『！！！！！』
その一言が止めだった。その瞬間、雷の雨は止まり、天からの声も

止んだ。まさに、完全無敵・・・疑い様のない勝利だった。
その後、彼女が目を覚ました時にステイクはその場にポツンと座っていた。なんだかんだ言って、彼女が自分を見失わないように待ってあげるやさしい男なのである。
「そんなわけあるか、ターゲットタウン目前でこんなに暴れまくって・・・本当に使えない天使だな。お前がいなきゃ、ターゲットタウンに入れないだろう。」
・・・フィアーの独り言もうかうか言ってはいられなかった。とにかくそうして、彼はようやく目的の町に着いたのであった。

続く

一章　戦いを望めない男　２（後書き）

あまりおもしろくなかったかもしれません。が、私は結構好きでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9785g/

混沌の輪廻の世界

2010年10月9日16時09分発行